折口といふ名字

折口信夫

青空文庫

折口といふ名字は、摂津国西成郡木津村の百姓の家の通り名とも、名字ともつかずのびて来た称へである。

木津村は今、大阪市南区（現在更に浪速区）木津となつた。所謂「木津や難波の橋の下」と謡れた、鼬川（イタテ）といふ境川一つを隔てゝ、南区難波、即、元の難波村と続いてゐる。東は今宮、西は南町（ミナン）と言ふ、かの渡辺（ワタナベ）で通つた、えた村である。此二つの村との間には、十年前までは畑も見られたが、今は、両方から軒並びが延びて来て、地境を隠して了うた。南町は、関西鉄道の線路敷が高いどてを横へてゐなかつたら、今頃は、名実ともに、百年二百年毛嫌ひを増上させて来た部落と、見わけがつかなくなつたはずである。南町は、事実、木津西浜町・木津北島町並びに、木津勘助町・木津三島町の一部になつて、呼び名の上では、区別はなくなつてゐるのである。村人の考へてゐる昔は、極近いおほざつぱなものである。どこまでが物識りの入れ智慧で、どこからがすなほに伸びて来た物語かは知れぬ。とにかく、木津は島であつた、と言うてゐる。そして其頃から、今の願泉寺と言ふ寺はあつた。浜辺に寺一宇建つてゐる図どりの掛けぢが、今も、かの寺にはあると言ふ。

願泉寺門徒の、石山合戦に働いたことは、人馬講（ニンマ）と言ふ願泉寺檀徒の講衆が「西（ニッ）さん」の法会に京へ上ると、他の国々の講衆の一番上席に据ゑられるのでも、証拠だてることが出来ると誇つてゐる。人馬（ニンマ）と言ふ名は、此村の真の種姓（シュウセウ）を、暗に、示してゐる様に思はれる。何にせよ、

石山の生き如来の為に、人として馬の様に働いてから、願泉寺衆をかう称へることになつたのださうである。雲雀のやうに大空まで翔り上つて、物見した処から雲雀（ひばる）、顕如上人根来落ちの際、莚帆を蔽うて、お匿し申した為、みしろぼを家名にすることを許された、など言ふ伝へを持つた家が、七軒ある。折口も其一つで、汀にもやうた舟への降り口（オ）を、案内申したと言ふので、上人から賜つたおりくちを、家名としたのだと言ふ、仮名遣ひや、字に煩されぬ説明である。其節、雲雀の先祖には、六字の名号（「三郷巷談」参照）、折口の先祖には、護り袋を下されたといふ。

折口の家は、わたしの生れた鴫町一丁目の家を、ところでは、本家と考へてゐる。静と言ふ兄の立てゝゐる此家は、折口姓を名のる家の中では、一番長い軒・広い屋敷を持つてゐる為、一見腹膨れらしく見える処からの思ひ違ひで、本家は、別にあるのである。

木津勘助町の二丁目と三丁目との間を、南町の方へ走る電車道が通つてゐて、そこに、勘助町の停留場がある。其辺が昔は、田傍（たばた）と言ふ小名であつた。老人は今も、さう呼んでゐる。其処は、叉杖（マタブリ）風になつた辻で、北から来て、つき当つた鋭角の先に、地蔵堂の大きなのがあつて、たばたの地蔵さんと言うた。此堂も今は、電車道敷の為に、此頃帰つて見たら、石の小さなお厨子の様な物を、北よりの人家の軒によせて拵へて、移してあつた。

此地蔵堂の後、叉杖の西側の枝にあたる勝間（こつま）街道に向うて、はなやと言ふ通り名の家があつて、やはり、折口を名のつてゐた。此が、折口の本家である。家の親類ではあるが、

血筋はすつかり、切れて了うてゐる。当主の清吉（セイ）といふ人は、小学では同級で、青洟（あをばな）を初中終啜つてゐた、おつとりした子であつたが、此家も、電車道に屋敷を奪はれて、折口の古屋敷は亡くなつた訣なのである。

子どもの頃、誰かゝらはなやは、鼻家（ハナヤ）・端屋の意で、崖の上にあつたので、扨こそ、根来落ちには道案内もした訣なのだ、と言ふ理のつんだ様な話を、聞かされたやうに思ふ。

併し、或はたばたの折口が、何時の頃にか衰へて、唯泉寺・願泉寺・田傍地蔵の花を売つた様な事が、あるのかも知れぬ。唯、花屋といふ商売を、賤業と見なしてゐる徳川頃に、如何におちぶれても、仏の花を商うてゐる家を、旧家七軒の中に数へなかつたであらう。なる程、人馬講の名の様な活動を、此村の草分けの人々がした頃には、或は此木津が、本願寺附属の、童子村・神人村風の処だつたかも知れぬが、所謂賤種階級を数へることの整うて後の江戸末期に、此村の古い家が、情ない商売をしようとも思はれぬ。弁解ではないが、本家とも言ふべき家が、妙な屋号を持つたことについて、疑ひを起さぬ訣にはいかぬ。先年亡くなつた祖母も、百姓一まきの家としての、所謂はなやを知つてゐるばかりで、花を売つてゐたことは知らぬ、と言うてゐた。此屋号は、はなやといふ音の第一綴音に、音勢点があるので、今の大阪語の花屋は、其音勢が亡（ナ）くなつてゐる。今を標準とすれば、勿論、花屋ではない、と言ふことは出来る。

しかし、音勢点の時代的移動や、熟語を作る際の抑揚移転を、考へに入れてかゝらぬ様な語原解釈は、無意味である。今の、あくせんとを標準とした此はなやの説明は、唯説明が出来ると

言ふだけで、さうに違ひない、と言ふ証拠には、ちつともなつてはくれぬ。併し何にしても、家の為には花屋でなく、鼻屋であつた方がよいか、と思ふ心が、かう書いてゐる間にも、強く動いてゐる。

折口の降り口であることだけは、根来落ちと関係を切り放しても、確かさうである。金田一京助先生は、あいぬ語の nu-essan が、折口に当つてゐる、とわたしの家の名義の話を聴いた末に、言はれたことがある。又、近頃発表せられたあいぬの詞曲「虎杖丸」の註釈で、

るゑさん ruwessan, nu-esssan 道の出口（浜の大道へ出る口）の事なり。下り口（オ）の義なり。

nu は道にて、essan の e は接頭語、san は出る意味なり。又下る意味なり。要するに、後方の高い処より、前方（浜）の低い方への運動なり（雑誌あらゝぎ大正七年六月号）。

と説明して居られる。誠によく似た、語の出来ぐあひである。単に語族が一つだ、と言ふだけで、縁もゆかりもない、北の島人の語ばかりでなく、ほゞおなじ語を話し、兄弟の情を持ちあつてゐる我々の間には、勿論、同じ組織の語で、似た地形を表す事になつてゐる。

子どもの頃、よく印刷屋の表に立つて、為入（シイ）れの三文判の出し箱（ダ）に並んでゐる判の中から、折口とあるのを見つけようとして、折田・折目など言ふ姓に出逢ふばかりなのに、肩身狭い思ひのした事を覚えてゐる。古子姓を立てゝゐる、仲の兄進が、造士館高等学校の生徒で、まだ汽車の矢嶽を越えなかつた頃、薩摩領に入つたとある立て場で、馬車の窓から、折口と書いた茶屋の表札を見て来た話を聞いて、兄弟、若い心に名状の出来ぬ心強さと、不思議さとを感じ合

うたことであつた。其後地図で見ると、其立て場のあつた、と思はれる処から西へ離れて、折口と言ふ大きな村のあるのを見つけて、其村から出た家であつたものかと考へた。地名索引から拾ふと、

折口（をりくち）薩摩出水　折口（をりのくち）武蔵榛沢

をりのくちの方は、のの割りこみ方が、聊か異風ではあるが、おりをおりみちなど言ふ過程を含んだ語と見れば訣る。

折戸（をりと）尾張愛知　上総武射　下野塩谷　羽前西置賜　能登珠洲　越後西頸城

折戸（をりど）駿河有渡　越中上新川　越前阪井

此等は、降り処（オト）で、降り口でなく、降り立つた場所であらう。

折立（をりたち）大和吉野　折立（をりたて）下総印旛　越前大野　折立（をりだて）美濃方県

下り立つた麓の地である。

折居（をりゐ）越後西頸城　同刈羽　同北蒲ノ沢　折井石見那賀

右と同じ意味の地名。降り坐（ヰ）である。多武峰の北口にも、下居をおりゐと訓む地がある。折井は、甲州出の三河武士の本貫と見えて、家康の旗本に、強の者折井氏があつた。

折坂（をりさか）出雲能義　折方（をりかた）播磨赤穂　折原（をりはら）武蔵男衾　折平（をりひら）三河西加茂　折田（をりた）上野吾妻　折津（をり

つ）上総市原　折橋（をりはし）常陸久慈　折野（をりの）阿波板野　折尾（をりを）筑前遠賀　折崎（をりさき）肥後玉名　折地（をりぢ）筑後下妻　折元（をりもと）豊前下毛　折谷（をりたに）加賀河北　越中上新川　折木沢（をりきさは）上総望陀　折尾瀬（をりをぜ）肥前東彼杵　折生迫（をりふさこ）日向北那珂　折宇（をりう）阿波海部

折井は、折坐とおなじ地形を言ふので、其よりも、古い時代に出来たものであらうか。

折合（をりあひ）土佐幡多　折木（をりき）磐城楢葉　折茂（をりも）陸奥上北　折浜（をりのはま）陸前牡鹿

此ほかにも、

織笠（をりかさ）陸中東閉伊　織島里（おりじまがり）肥前小城　織豊（おりとよ）尾張愛知

などあるが、織笠の折笠と同じ語らしいもの丶外は、其意をたどる事も出来ぬ。辞典によると、折峠（をりたうげ）越後岩船　下津（おりつ）尾張中島　下立（おりたち）越中新川　小里（をり）美濃土岐　折壁（をりかべ）陸中東磐井　折紙鼻（をりかみばな）長門豊浦　折敷畠（をりしきはた）安岐佐伯

右の中、小里は、小里出羽守など言ふ、戦国の武人の本貫である。摂津の遠里（とほさと）ではない）小野など丶同類で、折り廻む道の意であらうから、降りるとは没交渉らしい。

折口は、木津の地では、一切おりぐちと濁つて言ふ事はない。字の宛て方がうまかつたのか、外に訓み方もない為か、時々、おれくちと不吉な訓みをつけられる事があるばかりで、大抵始めて此妙な名字に出くはした人にも、すらりと通る様である。併し、おりくちと清んで訓んでくれる人は、あまりない。此頃では、とうかするとおりぐちと言うて、自分乍ら、ずぼらになつたのに、驚く事がある。

明治四十二年の天満焼けのをり、朝日・毎日の二つの新聞で募つた義捐金に、喜捨した人の中に、淡路三原（或は津名）郡何村の折口某と言ふ姓名が見えた。目のよる処に玉とやらで、注意してゐた為か、其頃南区二つ井戸に近い上大和橋の辺から、身投げして助けられた女の人の名字も折口で、此は播州生れであつた事を、やはり新聞で知つた。其頃は、折口が地形の名で、幾百里離れてゐても、苟も日本の土地でありさへすれば、何の聯絡なしに、勝手に幾らでも出来るはずの家名だ、とたかを括る様になつてゐた為、書きとめて置かなんだのが残念である。物心づいたわたしが見知つた、木津中の折口には、七軒あつた。折清（をりせ、代々清兵衛・清吉の立てゝゐる家）・折佐（をりさ、佐兵衛の後家よねといふ年よりが、今も生きて、兄の家に出入りしてゐる。其孫の佐吉と言ふのが、博打（バクチ）うちになつて、よりつかぬさうである）・折治（をりぢ、当主治兵衛は、新町辺で貸座敷をしてゐる）・彦右衛門（代々折口彦右衛門で、今は簾屋である）・折口げん（今は亡びた。此家の妹娘は、中村雀右衛門と言ふ役者の妻とか、妾とかになつたと聞いた）・折口ゆき（わたしの七八つの頃、村の南のはづれに近い裏家に、

此表札を見た。主人は其頃六十恰好の女であつた）、其外に、よねの継子で、勘当同様に家を出されてゐる市松と言ふのが、木津の中、何処かに住んでゐるはずである。

兄進の知人日疋重亮と言ふ人の話では、東京本郷座の辺に、折口冬と言ふ女名前の宿屋があるさうである。古顔の壮士役者中村秋孝といふ人の妻のよし。母に訊くと、其はやはり家の親類で、三十年程前まで、隣りあひであつた豆腐屋の娘で、堀江で茶屋を出してゐた者だ、と言うてゐた。

兄静の立てゝゐる家は、代々折口彦七で、曾祖父・祖父の二代は岡本屋と言ひ、岡彦と称へた。岡本屋と言ふのは、木津の名主で、ところから住吉まで二里近くの間、他家の地面を踏まずに、行くことが出来たといふ家である。曾祖父は、其処の番頭になつてゐたので、其屋号を専ら用ゐてゐた。曾祖母登代といふのが、非常な賢婦人で、諸芸・読み書き、何でも出来た人である。つぶれかゝつた家を、女手で引き起して、飛鳥造酒之介・上野つたの二人を養子にして、家を護つた。登代の継子（曾祖父彦七のうきよの子）彦次郎といふのは、学問嗜きであつたが、放蕩であつた為、勘当した。祖父彦七の代に、熊野から来た六十六部が、彦次郎が尚、熊野に生きてゐて、寺子屋を開いてゐるよしを伝へたさうだから、熊野の何処かには、家と深い関係のある折口が、一軒残つてゐるかも知れぬ。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集　3」中央公論社
　　1995（平成7）年4月10日初版発行
底本の親本：「『古代研究』第一部　民俗学篇第二」大岡山書店
　　1930（昭和5）年6月20日
初出：「土俗と伝説　第一巻第二号」
　　1918（大正7）年9月
　　「土俗と伝説　第一巻第四号」
　　1919（大正8）年1月
※底本の題名の下に書かれている「大正七年九月・八年一月「土俗と伝説」第一巻第二・四号」はファイル末の「初出」欄に移しました
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2007年4月8日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られまし

た。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

折口といふ名字

折口信夫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/